



MoNo 変身図鑑

第38回

クズ

クズ(葛)は「秋の七草」として、日本人にはなじみの深い植物だ。その旺盛な繁殖力のせいで邪魔者扱いされることも多いが、古くから衣食住にわたって日本人の生活を支えてきた有用な植物でもある。

原産地は日本全域を含むアジア。夏から秋にかけて、穂のような紫紅色の花をつける。若芽や若葉はゆでて和え物に、花穂は天ぷらにして食べることもできる



クズの繊維を発酵させ表皮を洗い流したら、美しい内皮が現れる。それを細く裂いてつなぎ、長い葛糸にする



葛布は縦糸に木綿糸、横糸に葛糸を使って織られる

日本人とかわりの深い有用植物

クズは日本中の山野に自生しているマメ科のつる性多年草。繁殖力が旺盛で、太いつるを樹木や草木に絡ませながら、山の斜面一面をすっぽりと覆い尽くしていく。林の樹木の成長を妨げる有害植物でもあるが、日本人は古くから生活の中でクズを活用してきた。

最も活用されてきたのは根だ。根から採取されたてんぷんのくず粉は、穀類の乏しい山間の地方では貴重な保存食であった。最近ではかたくり粉やジャガイモに取って代わられたが、くず団子、くずまんじゅう、くず切りなど和菓子の原料にも使われてきた。くず粉を湯に溶いたくず湯は風邪や下痢に効き、根を乾燥して刻んだ葛根は、風邪薬の葛根湯の主薬にも用いられている。

茎は強く丈夫で、繊維からは葛布と呼ばれる布が織られた。葛布は明治に木綿が普及するまでは、農民の労働着から武士のはかまや羽織、着物にまで広く利用されていた。また、つるはわらよりも丈夫で腐りにくく、結束やつる細工に用いられてきた。

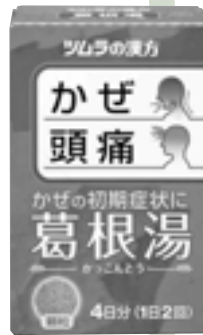
砂漠の緑化や飼料への用途に期待

荒地でもたくましく成長し地下深くに根を伸ばすクズは、堤防の土砂の流出を防止する上でも役立ってきた。その役割が注目され、アメリカや中国などは、堤防や土壌の保全のために日本のクズを導入している。もっとも、アメリカではクズがあまりに増殖し、結局は有害な雑草となってしまうというから、その生命力は植物界でも随一といえる。そして、この強靱な生命力は砂漠の緑化に役立つと期待されている。

クズはまた、飼料にも利用されている。日本は飼料用のトウモロコシや牧草をアメリカから大量に輸入しているが、そのアメリカではクズの栄養価の高さから、飼料として見直されているのだ。今後人口増加に伴い家畜が増えると、飼料の需要も増していく。砂漠のような不毛の地で人が手をかけなくても旺盛に育つクズは、大量の飼料を供給するには最適な植物といえる。長い間邪魔者扱いされていたクズが、地球と人類の未来を救うことになるかもしれない。

薬 Drugs

風邪薬の定番でもある葛根湯は、クズの根を乾燥させた葛根から抽出した葛根湯エキスを用いている



加工食品 Processed Foods

クズの葉の葉緑素を顆粒粉末にした栄養補助食品も商品化されている



くず粉はくず湯やくず切り、くずうどん、くずそうめんなど、日本の食の伝統を支えてきた食材だ



火山灰の砂漠を緑化するクズのパワー

1991年6月、フィリピンのピナトゥポ火山が大噴火した。火山の周りは広範囲にわたって自然環境が破壊され、豊かな森林は火山灰の砂漠へと姿を変えた。この火山灰砂漠を緑化するため、利用されたのがクズだ。兵庫県山南町の住民ボランティア(現IKGS緑化協会)と現地のNGOが協力し、日本に自生するクズの種子を集めて被災地に送り、ピナトゥポ山ろくの斜面にクズを植える活動が噴火の翌年から始まった。クズを植えた山の斜面では育ったクズが雑草を呼び込み、現地の植物も地力を回復。樹木の植林も始まっている。

現在、IKGS緑化協会はクズの利用を中止している。生命力旺盛なクズが、植林した木の成長を妨げてしまうのがその理由だ。しかし、火山灰の砂漠に復活した緑が、クズの力を見事に証明している。



山の斜面に生い茂るクズと、苗植えを行った現地のアエタ族の人々

つる細工

丈夫なクズのつるは、結束用のほかにバスケットや花挿しなどのつる細工にも使われている

©世界文化フォト



葛紙

クズの茎の繊維をすき込んだ葛紙。野趣あふれる厚手の和紙となっている



雑貨

Miscellaneous Goods



葛布

今も静岡県の掛川市や島田市で織られている葛布。スカーフやのれん、テーブルセンター、ハンドバッグから壁紙やクロスまで、さまざまな用途に用いられている

